

道徳科「人物教材」についての提案

— [個性の伸長] を中心に —

山崎 雄介

群馬大学教育実践研究 別刷

第41号 225～234頁 2024

群馬大学共同教育学部 附属教育実践センター

道徳科「人物教材」についての提案

— [個性の伸長] を中心に —

山崎 雄介

群馬大学大学院教育学研究科教職リーダー講座

A Proposal about Biographical Text in Moral Education: Focusing on the Item“Nurturing Character”

Yusuke YAMAZAKI

Program for Leadership in Education, Graduate School of Education, Gunma University

キーワード：道徳教育，人物教材，パブロ・ピカソ，野口英世

Keywords : Moral Education, Biographical Text, Pablo Picasso, Hideyo Noguchi

(2023年10月23日受理)

1 問題の所在

日本の道徳授業では、戦前から一貫して、実在の人物をとりあげた「人物教材」が重用されてきた。近年においても、たとえば、道徳「教科化」の直接的な端緒の1つである教育再生実行会議（2013：2，傍点引用者）には次のような言がある。

学校における道徳教育の教材として、具体的な人物や地域，我が国の伝統と文化に根ざす題材や，人間尊重の精神を培う題材などを重視する。

さらに，学習指導要領においても，小学校および中学校の「特別の教科 道徳」（以下「道徳科」）の教材についての留意事項の中に，以下の言及がある（文部科学省，2017a：171；2017b：157，傍点引用者）。

児童〔生徒〕の発達の段階や特性，地域の実情等を考慮し，多様な教材の活用に努めること。特に，生命の尊厳，社会参画〔中学校のみ〕，自然，伝統と文化，先人の伝記，スポーツ，情報化

への対応等の現代的な課題などを題材とし，児童〔生徒〕が問題意識をもって多面的・多角的に考えたり，感動を覚えたりするような充実した教材の開発や活用を行うこと。

一方で，人物教材については，主人公についての内容項目（徳目）の観点からの一面的な描き方や，事実についての情報の乏しさがしばしば批判されてもきた。たとえば宇佐美（1974）では，野中到（同：11-42），野口英世（同：62-69）をとりあげた道徳教材が，各々の人物やその業績について，きわめて一面的で粗雑な紹介しかしておらず，思考の素材にはおよそなりようがないことを厳しく指摘している。

筆者自身も，山崎（2022：218-219）において，現行の教科書教材「ミレーとルソー」（『小学道徳 ゆたかな心5』光文書院）の主人公，画家ミレー（Millet, Jean-François, 1814-75）についての描き方が，彼の実像とは乖離していることを指摘した。

そもそも，一般の教科であれば，事実関係等の不正確な部分については，教科書検定によって修正されることも多い。しかし，こと道徳科の人物教材について

は、ごく一部の例外を除き、検定はほぼチェック機能を果たしていないといってよい。ちなみに、「ごく一部の例外」としては、杉原千畝のいわゆる「命のヴィザ」(1940. 7~9 上旬)について、日独伊三国軍事同盟(1940. 9. 27)を引き合いに出した叙述が修正を求められた事例(浪, 2017:125)がある。これは、「時系列的に、後者が前者の阻害要因にはなることはあり得ない」との(同盟締結に至る経緯を考慮すればいささか怪しい)ロジックにもとづき、日本史の「負の側面」に関する記述を回避しようという意図によるものであろう。

ともあれ、ここでまず問題になるのは、実在の人物についての、事実関係が不正確な「物語」(個別的な事象についての明白な誤りだけでなく、時代背景等についての叙述の不正確さも含めて)を、道徳科の「教材」にすることを可否だろう。

と、こうした書き方をすれば、胸を張って「可」とする主張はないのでは、との疑念があるかもしれない。しかし、いささか持って回った言い方ではあっても、事実上それに近い発想は道徳教育界にあっては根強い。

たとえば藤田(2014:67, 傍点引用者)は、伝記教材の取扱いの留意点の1つとして、「人物の業績や行為そのものよりも、その行為を支えたものの考え方や心情について掘り下げ、ねらいとする価値に向かって考えを深めさせる」ことを挙げている。

もとより彼も、たとえば野口英世を例に引いて、教師自身による教材研究のレベルでは、「ヒューマニストでエゴイスト、孝行息子にして道楽息子、細菌王にして借金王、日本人にして世界人であり、そのどちらが欠けても、野口英世ではない。教師は、人物の多面的理解を心がけねばならない」(藤田, 2014:78, 傍点引用者)とは述べている。

しかしその一方、藤田は、こうした多様な側面を、授業において学習者に提示することには懐疑的である。具体的な言を引いておこう(同:78-79, 傍点引用者)。

しかし、特に小学校教育の場において、そのすべての面を教える必要があるかと言えば、それは別問題である。例えば、小学校低・中学年の子どもに、野口英世は、金遣いが荒く、お金が入れば一晩で飲んでいと教えてから、その後で親孝行を

したと教えても、よい方は印象に残らず、悪い方だけが印象に残ってしまうであろう。高学年や中学生になれば、幼少年期において貧しい中で育ち、お金の計画的な使い方を学ぶことのなかった野口英世が、金遣いが荒くなったことについてある程度理解できるかもしれない。しかし、これとでも、教師がそのようなことについて示唆を与えなければ子どもが自ら気付くことは難しいのではなからうか。いずれにせよ、事実であるということと、教えてもよいということは、別問題である。

ここには問題が2点指摘できる。第1に、引用の前半部分における、人間の「よい面」と「悪い面」とが簡単に分離可能であり、後者を隠して前者だけを提示することが可能であるという(暗黙の)前提である。のちに詳述するが、伝記の素材となり得るような突出した業績を挙げた人物にあってはしばしば、これらの両面は分かちがたく結びついており、無理に分離して一方のみを提示すれば、描かれる人物像はリアリティを欠いた平板なものになりがちである。

第2に、引用の後半部分での、「学習者が自ら気づくことが難しいものは、道徳(科)教材に含めるべきでない」という発想である。実際、道徳科の読み物教材には、一読すれば作者の言わんとするところは明らかかなものが多いのは事実である。しかしそれは教材の「美点」というよりは、大学生や大人による道徳授業についての回想にきわめて頻繁にみられる、「結論が見え透いていてつまらなかった」という印象の元凶であったというべきであろう。

ここまで露骨に事実を軽視しない論者にあっても、とくに過去の偉人についての不正確な教材の「裏取り」の必要性はあまり自覚されていない。たとえば柳沼(2019)も、存命中の人物については社会的評価が変動し得ることに注意を喚起しているが、過去の偉人についての不正確な教材についてはとりたてて指摘していない。しかし、山崎(2022)で教材「ミレーとルソー」(『小学道徳 ゆたかな心5』光文書院)を例として指摘しておいたように、むしろ、評価が定まったとされる過去の偉人の方で、いい加減な「伝記」からの転用による不正確な「社会的評価」の悪影響が多発しうるのも事実である。

一方、先の問いに「否」の立場をとり、しかも人物

教材自体を否定しないのであれば、教材文をいかに事実即したものにすかという課題が浮上する。

この課題は、第一義的には教科書作成者のものではある。しかし、それについては短期的な実現可能性が低いことは前述の通りである。

一方、教科書教材の誤り、欠落部分等についてのリサーチを「教材研究に生かすことが、教員に求められる」（伊藤・石村，2018:55）とする主張も存在する。しかし、教員の労働環境の改善が遅々として進まない中、道徳科の教材研究に割ける小・中学校教員のリソースは乏しいというのが実態であろう。そこで、山崎（2022：219-220）では、「出典の刊行年が古い，児童向け読み物等からの転用，教科書刊行委員会等が著者，といった教材の主人公について，新書程度で信頼に足る伝記類がある場合は，それで事実関係を補う」という対応策を提案しておいた。ただし，そこでの叙述が，「児童向け読み物」への過度にネガティブな印象を与えかねないものになっていたことについては，ここで少し修正しておきたい。

奥山（2019）は，道徳科教科書における人物教材が，総じて内容項目＝徳目の絵解きじみた平板なものになっていることを批判する一方，本稿でも参照している秋元（1983）など，児童向けに書かれた信頼しうる伝記をいくつか挙げています。上記拙稿での指摘も，こうした良質の児童向け読み物まで否定するものではないことを強調しておきたい。

現場教員による教材研究による，教材の欠陥の克服可能性について話を戻す。筆者自身がある機会に，この件について現場教員と対話したところ，欠陥のある教科書教材の「尻拭い」へのモチベーションはきわめて低く，前述の対応策の実効性は高くない，というのが実感であった。

そこで，本稿では，2で実際の人物教材をとりあげ，内容項目とも対比しつつその欠陥をあらためて指摘したうえで，3では，教材文の試作を行う。

2 人物教材の欠陥の諸相

—小学校高学年「個性の伸長」を例に—

2.1 事例1：「感動したこと，それがぼくの作品～パブロ・ピカソ」

人物教材が多用される内容項目の1つに，領域A

「主として自分自身に関すること」のうちの「個性の伸長」（小），「向上心，個性の伸長」（中）がある。この項目では，多くの教材文で，主人公をいわば「見習う」ことが期待されている。それだけに，主人公が往々にして欠点のない模範的で，その分，人間としてのリアリティのない人物として描かれるなどの欠陥も生じがちである。

一方，この項目は小学校第5・6学年では，「自分の特徴を知って，短所を改め長所を伸ばすこと」（傍点引用者）と表現されており，「短所」についての描写の有無，描写がある場合の描かれ方，などによって，学習の深まりも左右されると考えられる。ここでは，いささか問題ありと考えられる教材を2つ採りあげて検討する。

第1に採りあげるのは、『新編 新しい道徳5』（東京書籍）所収の「感動したこと，それがぼくの作品～パブロ・ピカソ」である。同教材は，ピカソ（Pablo Ruiz Picasso, 1881-1973）の生涯について，「父（自身が画家兼絵画教師であった）のアトリエで描いた鳩の絵で父の画筆を折らせた」というエピソードから，代表作「ゲルニカ」の製作（1937），戦後の作品に鳩のモチーフが復活したことまでを概説している。

しかし，この教材は，安直といわざるを得ない児童向け読み物が典拠となっており，多くの問題を孕んでいる。以下，順次指摘しておく。

①「芸術家＝清貧」イメージの押しつけ

教材文では，パリ移住後のピカソについて「絵は売れず，生活はしだいにまずしくなり，「寒い夜は，せつかくかいた絵をもやしてあたたまるありさまでした」，「あなたの絵を五十年間買ひましょう」という画商の申し出を「気にせず……ひたすら感動したことを絵にあらわした」と，彼が金銭のことは一切気にせず，それゆえ貧困に苦しんだかのような描写がされている。

しかし，生前には1枚しか絵が売れなかったゴッホとは対照的に，美術史上でも稀なほど，ピカソは「生前に経済的に恵まれた画家，つまり『儲かった』画家」（西岡，2013：11，傍点引用者）である。もちろん，彼にも貧しかった時代がないわけではないが，それは「最大限に見積もっても二年ほど」であり，しかも「この間も知人や実家の経済的援助に頼りながら，

画商や友人に絵を売ったりしていますから、その貧窮の度合いも、放浪時代のゴッホのように絶望的なものではありませんでした」(西岡, 2013:28) とされる。

さらにいえば、ピカソが「生前に経済的に恵まれた」のは、絵が勝手に売れたというわけではなく、彼自身が画商を戦略的に活用したからである(西岡, 2013:20)。その意味でも、ステレオタイプな「清貧」イメージは、ピカソの実像とは対極にあったといわざるを得ない。

②事実や歴史的な文脈の不正確さ

また、教材文には、事実や歴史的な文脈についての不正確さも目立つ。

第1に、ピカソの絵の技量に圧倒されて父が画筆を折ったというエピソードについては、「真偽は不明」とする文献も多く、また、Richardson(1991/2009:118-119)では、ピカソに鳩の絵(の仕上げ)を描かせた理由として、父自身の視力の低下を挙げるとともに、父自身も絵を全く描かなくなったわけではなく、20世紀初頭まで絵筆をふるい続けたことが紹介されている。

第2に、教材文には、作品「科学と慈愛」(1897)が美術展で受賞し、王立アカデミーに入学するあたりの時期のエピソードとして、以下のような記述がある(傍点引用者)。

ピカソの努力と才能はみとめられ、宮廷画家になることをすすめられるほどでした。宮廷画家になれば、一生生活の心配はありません。／しかし、ピカソは、こう言ったのです。／「人にかかされる絵はもういやだ！ 自分のかきたい絵をかくために、芸術の都パリに行く。」

ここにはいくつか深刻な問題がある。まず、美術関係者等によって書かれたピカソの伝記・略歴にあつては、「宮廷画家になることを勧められた」旨の叙述はみられないことが多い。つまり、このエピソードは、仮に事実であったとしても、とりたててピカソの「進路」を左右するような重みをもったものではないと判断せざるを得ない。

その最大の理由としては、ピカソの青年期には、「宮廷画家」の時代はほぼ終焉していたということがある。たとえば中野(監修)(2014)では5名の宮廷

画家が採りあげられているが、時代的にいちばん新しいのはヴィジェールブラン(Élisabeth-Louise Vigée Le Brun, 1755-1842)であり、それでも没年がピカソの生年の約40年前となる。ピカソの時代には、王侯貴族など特定のパトロンに依存するよりは、画商を通じて買い手を確保するというのが、画家として経済的に合理的な選択肢になってきていたのである。

ついでにいっておけば、「宮廷画家になれば自分の描きたい絵は描けない」という、ピカソというよりは教材文の著者による思い込みへの反証を1例挙げておくならば、カルロス3世・4世、ホセ1世、フェルナンド7世の4人の王のもとで宮廷画家を務めたゴヤ(Francisco de Goya, 1746-1828)が好例だろう。彼の「地べたを這うように生きる農民をはじめ、最高権力者の国王まで、また獣のように殺しあう人間たちから、優美な恋愛模様まで」という題材の、そして「感覚的なロココ風あり、内面を覗き見るベラスケス……風あり、荒々しいバロック調あり、透徹したリアリズムと異様な暴力性の合体があり、悪夢のごとき幻想があり」といった画風の多様さ(中野(監修), 2014:128)は、「人にかかされる絵」とは程遠いものである。

③「個性」と「キャリア」との関係

そもそも、道徳科の内容項目はすべて、「よりよく生きる基盤となる道徳性を養うため」(文部科学省, 2017a; 2017b)に存在するはずである。とすれば、「個性」を「伸長」するのも、究極的には学習者自身のキャリア形成に寄与するためのはずである。その意味では、教材文「感動したこと〜」(だけでなく、芸術家を扱った教材の少なくない部分)に通底する、「自らの芸術的信念」と「経済的成功」とを対立的にのみ捉え、後者を貶めるステレオタイプは、いまや有害無益というほかはない。

現代社会において、音楽であれ美術であれその他のジャンルであれ、それを「生業」として成り立たせていくのであれば、創作活動を収入に結びつける方途を講じることは——幸福にも、経済的側面を献身的に担ってくれる支援者に恵まれた場合を除き——不可避の筈である。

たとえば、ロックバンド「氣志團」の團長(リーダー)である綾小路(2004:110, 傍点引用者)は、そのあたりの機微を次のように端的に語っている。

だから、自分の中にはいろんな人間がやっぱり同居してると思いますよ。ほんとにやっぱりピュアに音楽大好きだ！ っていう面もあるし、それはそれで俺はメンバーの誰にも負けないつもりありますね。……けれどもそれとまた別で、そんながんばってる俺たちを、しっかりと世間の人たちに伝わ〔ママ〕るためにはなにをすべきか。俺の夢を実現させていくためにはなにが必要かっていうと、CDを売ることしかもうなかったですね。CD売れない限りはもう、俺のやりたいことはできない、って。これは今も課題ですしね。

もちろん、「やりたいこと」と「経済的成功」は予定調和的に一致するとは限らず、両者の齟齬は、創作者が個人である場合には当人の苦悩、集団である場合には成員間の軋轢をもたらすこともある。たとえば前記「氣志團」メンバーの白鳥（2014）はその点について以下のように証言している。

「会社が俺達みたいなルックスも良くなければテクニックもないバンドを2年も3年も育成してくれるわけがない。だから氣志團は即戦力として、すぐに結果を出さなきゃダメなんだ！」／翔ちゃんの執念は鬼気迫るものがあった（115、傍点引用者）。

どんどん上に行こうとする翔ちゃんと、地に足付けた活動を望むメンバーとの間に本格的に溝が生まれはじめたのは、『BOY'S COLOR』リリース後の2003年4月にスタートしたホールツアーのあたりから。……この時期から〔過密なスケジュール、ライブに演奏以外の多様なパフォーマンスが含まれており、その準備に時間がとられることなどにより〕まともな練習時間が取れないことに対して、みんなイラ立ちを隠しきれなくなってきた。……メジャーデビューから2年間、がむしゃらに走り続けてきたことによる勤続〔ママ〕疲労が心身ともに積み重なって、バンド内の人間関係が一番グチャグチャになってたのがこの時期だと思ふ（135-137）。

このようにみえてくると、学習者自身が自らの「より

よい生き方」を探究していく上では、評価が確定してはいるけれども、社会状況が違い過ぎて直接の参考にはならない過去の偉人よりは、同時代の人物を積極的に採りあげた方が好適でないかと考えられる。ただし、現行の教科書教材にあっては、同時代の人物であっても、肝心なところが描かれないことも多い。

たとえば浪（2019：129-132）は、ある中学校教科書の教材文での主人公・黒田博樹（もとプロ野球選手）についての叙述から、野球選手としてのキャリア選択に関わる重要なポイントが——本人の自伝には明確に描かれているにもかかわらず——欠落していることを指摘している。

2.2 事例2：「マンガ家 手塚治虫」

①「長所」と「短所」との機械的分離

第2に採りあげるのは、『小学道徳 生きる力5』（日本文教出版）所収の教材「マンガ家 手塚治虫」（編集委員会作）である。

同教材では、手塚（1928-1989）のマンガ家としてのキャリアを支えた重要人物として、小学校時代の担任の「乾先生」と、母親を挙げている。

前者は、体が小さく運動も苦手で、当時まだ社会的に認知されていなかったマンガを描くことに劣等感をもって手塚を、「自分のよさを伸ばせ」と励まし、物語づくりの楽しさを教えてくれたという。後者は、医学部在学中、医師をめざすか、すでにアルバイトで描いていたマンガで身を立てるかで悩んでいた手塚に、「マンガが好きならマンガ家になれ」と背中を押してくれたという。

もちろん、幼少期から職業選択に至る時期に、これらの人物が手塚に影響を与えたことは事実なのだろう。しかし、1960～80年代頃のマンガについてある程度の知識を有する読者ならほぼ誰でも知っていることと考えられるが、マンガ家としての手塚の創作の原動力としてまず挙げられるのは、第一人者としての強烈な自負や、同時代に評価されているマンガ家への強烈なライバル意識である。それらは彼の膨大な仕事量とその質を支える長所であるとともに、時には他者への攻撃的な言動としてあらわれる短所でもあった。

たとえば石ノ森（2004）は、手塚の創刊した雑誌に乞われて連載し、その斬新な表現で脚光を浴びた作品に対し、手塚が「あんなものは漫画ではない」と中傷

めいた言辞を弄したこと、のちにその件を謝罪に訪れた手塚が、自身の衝動を抑えかねていると吐露したことを紹介している。

そもそも、歴史に名を残すような業績を挙げた「偉人」にあつては、その長所と短所とは、内容項目にいう「短所を改め長所を伸ばす」といった、両者が分離可能で、「いいところ取り」が可能な関係にはなく、両者が分かち難く絡み合っていることの方がむしろ一般的ではないだろうか。

「マンガ家 手塚治虫」に立ち返ると、文中にある彼の短所は、「体が小さい」だの「運動が苦手」だのといった、「改め」る必要がそう強くもない、長所とは無関係のそれでしかない。上記のような長所と表裏一体の、それゆえ下手に「改め」ることが、「角を矯めて牛を殺す」式の事態を招きかねない短所が併せて提示されてこそ、「個性を活かす」ことへの学習者の思考が深まるのではないだろうか。

②反面教師としての「個性」

突出した人物における長所と短所との不可分性は、時として後者の影響の大きさにより、致命的な事態を惹起することもある。教材「マンガ家 手塚治虫」からは話が逸れるが、こうした、「見習うべき」対象であるよりは「反面教師」としての人物について、道徳科ないし高校「公共」等で教材化する可能性はないだろうか。本稿では詳細に展開する余地はないが、予備的に提案しておきたい。

以前から断片的に報道や告発があつたが表立った対処が怠られてきた、芸能事務所社長兼プロデューサーのジャニー喜多川こと喜多川擴（1931-2019）による所属タレントおよびタレント候補生への性加害が、英BBCによるドキュメンタリー番組“Predator: The Secret Scandal of J-Pop”の現地および日本国内での放送（いずれも2023年3月）を契機に一気に社会問題化した。

この件については、現在進行形の部分も多く、教科書教材になる可能性はほぼ皆無と思われるが、道徳科内容項目〔個性の伸長〕以外にも、教科等横断的に展開しうるさまざまな論点を孕んでいる。

第1に、少年の秘められた資質・才能をいち早く見抜き、芸能活動の成功へと導いていく手腕という「長所」と、結果的に性加害へと帰結した彼自身の性的

志向という「短所」（社会的に受容されない性的志向を「依存症」とみるならば、これを「短所」というのは語弊がある面もあるが）とが、おそらくそう簡単に分離可能ではないという事情である。とくに前者については、ジャニーズ事務所で成功を収め、長期間所属した者から（たとえば錦織，2023）だけでなく、まさに性加害を告発した当事者から（たとえばオカモト，2023）も異口同音に評価されているところである。

さらにいえば、「史上最悪」とまで評されるほど被害が拡大した原因の一端には、1980年代以降の事務所の急成長、それによる入所希望者の急増という、喜多川の「長所」に起因する要素が厳然として存在する。

こうした長所と短所とについて、都合よく前者のみを伸ばし後者を改めることが、はたして喜多川擴個人の努力のみによって可能であつたのか？ 可能でなかったとすればどのような対処があり得たのか？ それが第2の問題である。

日本においては、逮捕・服役を経験した性犯罪加害者への治療的・教育的対処には相応の歴史と蓄積があるが（たとえば門本・嶋田（編著），2017参照），これらはあくまで「事後の」対応であり、再犯予防である。また、精神科の依存症外来での対応（原田，2019など参照）もなされてはいるが、これも、多くは痴漢で逮捕されるなどした者が通院するといったケースであり、事件化していない段階での対処が社会的なコンセンサスになっていたり、方法論が確立されていたりするとはいいがたい。

さらにいえば、性犯罪者への治療においては、当人の性衝動の背景にある「認知の歪み」などの要因への対処が行われるが、未成年など社会的に許容されない対象への性的欲望をすべて、そうした形で治療が可能であり、またそうすべきな「欠陥」へと還元・解体することが可能であるかについては疑義があり得る。

もとより、被害者の恐怖、嫌悪感といったものは当時でも感知可能であつたはずだという意味で、喜多川の行為について弁護することはできない。とはいえ、現時点でのその評価については、上記のような社会的文脈も考慮すべきではあろう。

第3に、学習者の今後に活かすという意味では、いわゆる「生命の安全教育」などとも連動しつつ、事件からどのような教訓を引き出すかという点も重要であろう。たとえば、「職場、学校といった、権力関係を

伴った、かつ閉鎖的になりがちな空間にあっては、性加害を含む各種人権侵害について、独自のリスクがあり得ること」、「加害を受けそうになった際の、個人でできる身の守り方や、活用できる外部の支援窓口はどのようなものか」などがあり得るだろう。

3 教材文作成の試み

3.1 野口英世についての既存教材

本章では、不正確・一面的な「伝記」教材が教材化されることの多い人物として、医学者・野口英世(1876-1928)を採りあげ、彼を扱った既存教材を批判的に検討した上で、自作教材を提案する。

野口英世について現在使用される可能性のある教材としては、たとえば「黄熱病とのたたかい」(竹内善一作、『私たちの道徳 小学校五・六年』文部科学省。ただし初出は『小学校 読み物資料とその利用「主として他の人とのかわりに関すること」』文部省, 1991)、「志を得ざれば、再びこの地を踏まず―野口英世と母シカの物語―」(編集委員会作、『小学道徳⑥ はばたこう明日へ』教育出版)がある。

まず前者は、内容項目[感謝]の教材であり、野口が41歳のとき、ニューヨーク郊外の山荘で静養する中での回想で小林栄(尋常小学校卒業時の野口と母シカに高等小学校進学を勧めるとともに学資を援助、野口の渡米後も郷里の家族の面倒をみる)、渡部鼎(幼少期のやけどで不自由になっていた野口の左手の手術を担当、のち彼を薬局生見習として自宅に住ませる)、血脇守之助(野口の東京での学業を支援するとともに、渡米後も度々借金の求めに応じる)、フレクスナー(教材文での表記はフレキシナー。「アポなし」で渡米した英世を受け入れ、ロックフェラー研究所にも帯同するなど、米国での英世の上司であり研究上のパートナー)といった恩人の名が列挙される。ただし、カッコ書きで補足した支援の内容は教材文では示されていない。

そして、「自分はそれらの人々の期待に十分に答えているだろうか」、「今までのことをふり返りながら、いまだに他人の善意にあまえきっている自分を情けなく思うのであった」との叙述の後に、エクアドルでの黄熱病研究、その約10年後の西アフリカでの再度の黄熱病研究と自身の感染、死去が語られる。教材文の

最後は、世界中の人々がその死を悼んだこと、ニューヨークのブロンクスにある墓地に墓碑が建てられ、その業績が称えられていることで結ばれている。

後者は[家族愛、家庭生活の充実]の教材である。野口の渡米時の気がかりが母シカのことだったという叙述に始まり、父親が飲んだくれで碌に働かないため母が生計を支えていたこと、幼少期に囲炉裏で大火傷をして、高等小学校在学時に周囲の援助をうけて手術をするまでは左手が不自由だったこと、その後の米国での活躍が前半で語られる。

後半では、帰国を強く乞う母からの手紙に答えて日本に一時戻った際の母子の交流が描かれた上で、野口が生涯最後に黄熱病の研究に「果敢に挑んだ」こと、上記の帰国の3年後にシカが亡くなったことで話が閉じられている。

これら教材の問題点として、第1に、野口の業績についての評価が不正確なことがある。とくに、野口が生涯最後に手がけた黄熱病研究について、彼の熱意や、結果的に自身がそれで命を落とした、つまりは「命がけの」研究になったことをいささか情緒的に称揚するばかりで、その結論の正誤についてきちんとと言及していないことは重大な問題である。

上記2点の教材文では、たしかに黄熱病研究における野口の結論が「正しかった」とは述べていない。しかし、南米での第1次の研究で野口が黄熱病の病原体として名指したのは実はウイルスのそれであったこと、第2次の研究でも、病原体の同定には至らなかったことは示されていない。もっともそれは、必ずしも野口自身の落ち度というだけではなく、黄熱病の病原体はウイルスであり、そもそも彼の用いた光学顕微鏡で同定するのは無理であった、という事情もあったことはふまえておく必要がある。

ともあれ、これら2つの教材文以外にも、野口の生涯最後の仕事についてのこうした「過大評価」、あるいは「不都合な事実への言及の回避」により、たとえばある指導案での「教材研究」にあるような、「南米エクアドルにおいて黄熱病の研究を不眠不休で続け、黄熱病の予防ワクチンを作り上げた」(<http://www.fuzoku.tottori-u.ac.jp/~fusho/kenkyu2006/52.pdf>, 傍点引用者, 2023年10月22日確認)といった、明白に誤った叙述(エクアドルでの研究でワクチンを開発したことは事実だが、病原体の同定が誤っている

以上、「黄熱病の」ワクチンではあり得ないが（再）生産されるリスクが生じているのである。

第2に、前者の教材では、一連の支援者からの援助が、もっぱらそれらの人々の自発的意思に基づいて行われたように描かれているが、実際には、野口の側から支援や借金を求めることがしばしばであった。

第3に、これは後者の教材についてであるが、①帰国を求めるシカの手紙に野口がすぐに応えたかのように描かれていること、②その手紙にシカの写真が同封されていたと述べられていること、はいずれも誤りである。

まず、くだんの手紙は1912（明治45）年1月15日付であるが、野口が実際に帰国したのは1915年の9月であり、相当の開きがある。また、シカの写真が同封されていたのは、1915年、野口の帰国を急がせるため、彼女の老いた姿を見せようと考えた支援者の1人からの手紙であった（プレセット、中井・柘矢訳、1987:201）。

このように、まともな「教材研究」をすれば訂正可能な誤謬や偏りが、宇佐美（1974）の批判から50年近く経ってなお、道徳科教材――しかも、文科省自身が作成・配布したそれや教科書所収のそれ――の世界では蔓延しているのである。そこで本稿の最後に、当の野口英世を主人公に、できるだけ伝記的事実を正確に踏まえた上での教材文の試作を試みる。

3.2 試作教材「野口英世」

①教材「野口英世」

最近では現金を扱うことが減ってきたとはいえ、みなさんも、千円札に描かれた肖像画の人物は見たことがあるだろう。この人物・野口英世は1876（明治9）年11月、現在の福島県猪苗代町で生まれ、1928（昭和3）年5月、のちに述べるように、研究のために訪れていたアフリカで亡くなるまで、当時としても長いとはいえない生涯の中で、さまざまな苦難とたたかって生きた人だった。

英世（生まれたときにつけられた名は清作で、こう名乗るようになったのは22歳のときからだが、わずらわしさを避けるため、この文では「英世」で通す）の家は貧しく、おもに母・シカが農業で家計を支えていた。そのための忙しさもあって、英世は1歳のとき、いろりに落ちてやけどを負い、左手が不自由になってしまう。

「その手では農作業は難しいので、学問で身を立てなさい」という母の励ましや、左手のことを同級生からばかにされたことへの反発心もあって英世は勉強に励む。とはいえ、英世の時代には、いまでいう「義務教育」は尋常小学校の4年間だけで、それ以上学校に行くことは、家計に余裕のある家の子でないと普通は無理だった。

しかし、尋常小学校の卒業試験（当時は小学校でも、上の学年に進級したり、卒業したりするためには試験に合格しないといけなかった）で、英世の優秀さに目を止めた教師・小林栄が試験の翌日にシカと英世を呼び出し、「自分が費用を援助するから」と英世を高等小学校に進学させることを勧めてくれる。

その後も英世は、左手の手術のためにお金を出しあってくれた同級生の親や小林、手術を成功させて左手をある程度自由に動くようにしてくれるとともに、自分の医院で薬局生見習として働かせてくれた渡部鼎、渡部の知人で、東京での修業時代のめんどうを見てくれた血脇守之助など、さまざまな人々の助けで医学の道へと進んでいく。のちに英世が日本を離れてからも、小林は郷里の野口家の人たちの世話をしてくれたり、血脇は英世の様々な相談に乗ってくれたり、長い間英世を支えていくことになる。

さて、高等小学校を卒業した英世は、渡部の医院での見習、東京の血脇の勤務先の高山歯科医院での小使としての勤務、その前後に医術開業試験の前期試験・後期試験の受験（それぞれ1回で合格）、済生学舎（医師志望者のための私塾）での学びといった経験を積んでいく。ただし、そうした道のりではしばしば、将来への不安もあって学業や仕事に身が入らず、夜遊びにふけるといったこともあった。その中では、学業などに使うとって借りたり贈られたりしたお金を使いこんでしまうということもあった。

もちろんそれはほめられたことではないし、小林や血脇をはじめ、周囲の人々を呆れさせることもしばしばではあった。しかし、それでも見捨てられないだけの何かが、すでに英世からは感じられたということかもしれない。また英世自身にも、迷惑をかけた相手に何度も頼みごとをする押しの強さがあった。

ともあれ、その後の英世は、順天堂病院での学術雑誌編集、北里伝染病研究所、横浜検疫所での勤務を経て、1900（明治33）年12月、以降の彼の拠点となるア

メロカに旅立った。

英世は、北里伝染病研究所での勤務中に知りあったサイモン・フレクスナーを頼って、彼の勤務していたペンシルバニア大学にたどりついた。大学との間で正式な話はない状態で突然現れた英世にフレクスナーは驚くが、当時手がけようとしていた蛇毒の研究を担当させることにする。そうこうするうちに研究資金を提供してくれる人も現れ、英世の研究生活は軌道に乗り出す。

このころ英世が書いた手紙には、日本の医学界や社会に対する厳しいまなざしがうかがわれる。たとえば小林への手紙では、日本からの留学生が「一部の好奇心にかられ、かつは、博士号を実際に買い求めて、帰国後大ぼらを吹こうとするその心根」を「日本のために実に残念であります」と非難している。

また、血脇への手紙では、「この自由な国においては日本的な世渡りの方法はかえって成功せず、しかも『当たって砕ける』式の直感的精神が一番有効」で、自分の欲しいもの、してほしいことを率直に相手にぶつけ、それによって協力者を求めるのが早道だと書いている。

英世のこうした言動からは、彼自身が、自身の青年期に日本の医学教育の主流であった帝国大学（現在の東京大学）で体系的な教育を受けたのではなく、苦勞しながら時々の勤務先で学んできたことへの劣等感、敷かれたレールに乗っている者たちへの反感といったものがうかがい知れる。

その後英世は、フレクスナーが初代所長となったロックフェラー研究所などで精力的に研究活動を展開する。そうした活動の初期に挙げられた成果で、現在も医学の歴史で重視されているのは、前述の蛇毒研究のほかに、精神病とされていた進行性まひの患者の病巣に梅毒菌を発見し、精神病にも脳の機能以外の器質的な原因があり得ることを明らかにしたことである。これ以降の研究成果も含め、英世は1914(大正3)年、1915(大正4)年、1920(大正9)年の3度にわたり、ノーベル医学賞候補になったほか、日本国内でもさまざまな賞を受賞している。

しかし、こうした成功もあって、光学顕微鏡で細菌を発見する自身の能力への過信、試験管洗いまで自分でやらないと気が済まないというこだわりなど、研究者としては「弱点」といわざるを得ない特徴をも、英

世は抱え込んでしまうことになる。そのため、英世の発見や主張には、のちに誤りが指摘され、覆されたものもいくつかある。

その最大のもは、英世が生涯最後に手がけ、安直な伝記では——その死につながったこともあり——彼の最大の業績であるかのように描かれている黄熱病研究である。

これは、まず1918(大正7年)6月から、エクアドルを皮切りとした南米での実地調査によって開始される。その過程で彼が黄熱病の病原体としたものは後に別の病気のものであることが示され、彼が開発したワクチンも、黄熱病には効果がないことが判明した。そして、1927(昭和2)年10月からのアフリカでの研究において、英世自身が黄熱病に感染し、おそらくは以前に感染していた病気とも相まって、翌年5月に現地で命を落とすことになる。黄熱病の病原体は細菌よりはるかに小さいウイルスであり、英世が用いていた装置では見ることはできなかったのである。

つけ加えておけば、学問の世界で、失敗することは決して恥ずかしいことではない。学問の進歩は、ゼロからの新発見だけでなく、先人が出した結論を正しいかどうか確かめたり、その足りない部分を補ったりといった営みによってもたらされる。こうした事情をたどって、「われわれがより遠くを見通せるのは、巨人の肩の上に乗っているからだ」(ニュートンによって有名になった言葉)と言ったりするが、その意味では、英世もまた、後世の医学の進歩を支えた「巨人」のひとりであったといえるだろう。

(参考文献：秋元、1973；仲野、2013；プレセット(中井・栞矢訳)1987)

②内容項目

基本的には小学校高学年[個性の伸長]、中学校[向上心、個性の伸長]、小学校高学年[真理の探究]、中学校[真理の探究、創造]が想定される。

既存教材でありがちな「長所」とほぼ同義の都合のよい「個性」観から一歩踏み出し、長所と短所とが複雑に絡み合った「個性」について児童生徒が自身に引きつけて考察したり、科学的な「探究」の実際——同じ研究グループのメンバーだけでなく、先人も含めた科学者のコミュニティによって行われることなど——について関心をもつこと、などが期待される。

付記

本研究はJSPS科研費JP20H00103の補助を受けたものです。

文献

- 秋元寿恵夫 (1973) 人間・野口英世. 偕成社文庫.
- 綾小路翔 (2004) 夢見る頃を過ぎても. ロッキング・オン.
- 中央教育審議会 (2008) 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申).
- 藤田善正 (2014) 伝記による道徳教育—歴史の変遷と教材化への視点. 大阪総合保育大学紀要, **9**: 67-82.
- 原田隆之 (2019) 痴漢外来—性犯罪と戦う科学. ちくま新書.
- 井出洋一郎 (2014) 「農民画家」ミレーの真実. NHK出版.
- 石ノ森章太郎 (2004) 風のように…, 中野晴行 (編) マンガ家誕生. ちくま文庫: 139-182. (同作品の初出は『ビッグコミックスピリッツ』1989年35号—36号. 手塚逝去をうけた追悼作品)
- 伊藤利明, 石村由利子 (2018) 道徳教材としての「先人の伝記」の適切性と有用性. 人文科学論集, **97**: 53-63. (名古屋経済大学)
- 門本泉, 嶋田洋徳 (編著) (2017) 性犯罪者への治療的・教育的アプローチ. 金剛出版.
- 教育再生実行会議 (2013) いじめの問題等への対応について (第一次提言).
- 文部科学省 (2017a) 小学校学習指導要領.
- 文部科学省 (2017b) 中学校学習指導要領.
- 中野京子 (監修) (2014) マンガ西洋美術史01「宮廷」を描いた画家. 美術出版社.
- 仲野徹 (2013) なかのとおるの生命科学者の伝記を読む. 秀潤社.
- 西口啓太, 渡邊隆信 (2020) 小学校における「特別の教科 道徳」の教科書分析: 「内容項目」との関連を中心に. 教育科学論集, **23**: 1-9.
- 錦織一清 (2023) 少年タイムカプセル. 新潮社.
- 西岡文彦 (2013) ピカソは本当に偉いのか?. 新潮新書.
- オカモト, カウアン (2023) ユー. ジャニーズの性加害を告発して. 文藝春秋.
- 奥山恵 (2019) 道徳教科書の「伝記的読み物」—個性を伸ばし, 個人の努力で…?—. 子どもの本棚, **48(2)**: 32-34.
- プレセット, I.R. (中井久夫・柁矢好弘訳) (1987) 野口英世. 星和書店.
- Richardson, J. (1991/2009) *A Life of Picasso, Volume I: 1881-1906*. Pimlico: Random House.
- 浪伊豆生 (2017) 道徳「特別の教科」化の水準・再論—教科書検定と「道徳教育アーカイブ」. 前衛, **952**: 122-133.
- 浪伊豆生 (2019) 始動した道徳科のもとで何が起きているか. 前衛, **977**: 121-132.
- 白鳥雪之丞 (2014) スワンの涙. ソニー・ミュージックアーティスツ.
- 宇佐美寛 (1974) 「道徳」授業批判. 明治図書.
- 柳沼良太 (2019) 人物教材を用いた道徳授業の指導と評価—問題解決的な学習を通じた「深い学び」を求めて—. 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学, **68(1)**: 187-196.
- 山崎雄介 (2022) 道徳科教科書についての教材研究の提案. 群馬大学教育実践研究, **39**: 217-225.

(やまざき ゆうすけ)